



TITLE:

松田正久と政党政治の発展 ―政治家の責任、原敬との連携―(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

西山, 由理花

CITATION:

西山, 由理花. 松田正久と政党政治の発展 ―政治家の責任、原敬との連携―. 京都大学, 2016, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19456>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（法学）	氏名	西山由理花
論文題目	松田正久と政党政治の発展 —政治家の責任、原敬との連携—		
(論文内容の要旨)			
<p>松田正久は佐賀藩支藩出身で、政党政治家として初めて男爵に叙せられた人物である。大正政変期まで、近代日本で政党政治が発展していく過程において、常に自由党・憲政党・政友会の中心にあった。「初の政党内閣」である第一次大隈重信内閣の蔵相をはじめとして5つの内閣で大臣を歴任した。</p> <p>松田正久については、松田家所蔵の史料が散逸し、「松田正久関係文書」のようなまとまった史料がないゆえに本格的な研究がなされてこなかった。本論文は、松田に関わった政治家・官僚等の一次史料や、新聞・雑誌の松田の発言や論説等の多数の新史料を基に、松田についての初めての本格的な伝記的研究として構成されている。</p> <p>「はじめに」では、松田正久を通して政治家の責任と近代日本における政党の地域性克服について考察する意義を論じ、研究史の整理と本稿の課題について述べている。</p> <p>第一部では、中央での松田の政治構想と政治指導を論じる。</p> <p>第一章では、国会開設以前の松田の動向を明らかにした。松田は、西周のもとで外国語と国際法を身につけ、フランス・スイスに約2年半留学した。帰国後は、次第に過激化する自由民権運動と距離を置き、翻訳を通して外国の知識を輸入した。また、故郷の初代県会議長を務めた。</p> <p>第二章では、立憲自由党時代の松田の政治構想と行動を明らかにした。松田は、近代政党は主義の一体性と高い統制力を有すべきというビジョンを持って活動し、立憲自由党の結成後急速に党内での存在感を高めた。板垣退助・星亨と連携して党改革を進め、自由党・改進黨に両属状態だった自由党九州派を党中央の地方組織へと再編成し、地域性を克服しようとした。</p> <p>第三章では、第一次大隈重信内閣前後の動向を明らかにし、その後の松田の行動を規定した挫折経験について述べた。星が失脚し、自由党が弱体化する中で、松田は民党合同路線に反対ではあったが、現状を打開するために進歩党との合同に参加した。第一次大隈内閣で、松田は蔵相に就任した。しかし、地租増徴に踏み切れず、星が駐米公使でありながら自ら帰国して同内閣を倒して地租増徴に踏み切った。松田は星の決断力に敵わず、大きな挫折を経験した。</p> <p>第四章では、政友会が創立され、「原・松田体制」が確立するまでの松田の政治構想を明らかにした。政党を改良し、政治参加を商工業者層にも拡大しようという伊藤博文の構想は、松田の内政政策とも合致していた。松田は、商工業の振興と、それを支える教育の普及を目指し、民間資本の活用を重視した。星の暗殺後、松田は自由党以来の政党政治家である党人派の代表となり、伊藤系官僚である原敬と連携した。列強との協調外交や自由民権運動観などで、松田と原には共通する点が多かった。</p>			

第五章では、松田が基盤とした党人派・政友会九州出身代議士会（九州会）に着目しながら、日露戦後の松田の政治指導を論じた。松田は「九州の松田」と見られないよう行動し、党人派の代表であるという地位をより重視した。原が政友会の実権を握ると、松田は原に同調する形で両者が連携して政友会を指導した。

第六章では、第二次西園寺公望内閣以降、松田が引退を考えるようになる時期を論じた。明治天皇の崩御により、松田は第二次西園寺内閣の法相として恩赦問題に取り組んだ。松田は初入閣以来、一貫して官僚の知識と経験を信頼し活用しようとし、政党内閣に対する官僚の信頼を獲得していった。明治天皇崩御後、高齢と体調不良から松田は引退を考えていたが、二個師団増設問題が起こると、山県有朋らが原因であると考えて藩閥批判を強めた。これは、原から山県らとの交渉の情報を聞かされていなかったからであった。そのため、原との会見後は護憲運動と距離を置き、純粋な政党内閣を待望するスローガンとして「松田内閣」の成立が叫ばれても、松田がこれに乗ることはなかった。政治家は軽挙妄動してはならないという信念を、松田は最後まで貫いた。

第二部では、選挙区佐賀県と松田正久との関係を論じた。

第七章では、松田が選挙区佐賀県で支持基盤を獲得する過程を明らかにした。九州地方の自由党勢力を主義による統一へと再編成した結果、松田は佐賀県で少数派になってしまった。しかし、松田は実現可能で合理的な政策を訴えることによって早くから商工業者など名望家層を自派に取り込み、地域的にも支持を広げていき、1899年の県議選で、大隈重信を背後にもつ武富時敏勢力に佐賀県全体で初めて勝利した。

第八章では、日露戦後の選挙区について論じた。松田は地方利益を訴えることはなかったが、大物政治家として地元で歓迎された。また、佐賀の乱が起こり、対外強硬論に傾きやすい地元を危惧し、江藤新平の復権運動にも加担しなかった。

「おわりに」では、本論文全体の総括として結論を整理し、松田が政党政治の発展に果たした意義を述べている。

(論文審査の結果の要旨)

松田正久は、佐賀藩の支藩出身の政党政治家で、自由党では板垣退助・星亨と連携して、その後身の政友会では原敬と連携して、政党と政党政治の発展を主導した。この間、党の最高幹部の一人として蔵相・法相・文相を合わせて数度歴任した。ところが、松田家所蔵の史料が散逸したこともあり、松田については、日本政党政治史の研究の中では断片的に触れられるだけで、まとまった研究はなかった。

本論文は、松田に関わった政治家・官僚等の一次史料や、新聞・雑誌の松田の発言や論説等の新史料を基に、松田についての初めての本格的な伝記的研究として構成されている。

本論文は、官僚出身の政党政治家原敬と党人派の松田とは対立していたという研究に対し、基本的に二人は連携していたということを論証した。二人に共通していたのは、藩閥政府を批判するだけでなく、政治家の責任を自覚し、現実の可能性を考慮して藩閥政府の政策を論評すべきとの姿勢であった。それは、政権に就いて行政を効率化し、藩閥以上に国民の力を結集し、外交・内政を担当できる責任ある政党を目指すことにつながった。これらは列強との協調外交、財政とバランスの取れた国防・産業・教育政策、国民の政治参加の漸進的な拡大等の政策になっていった。

自由党時代の松田と星・板垣、政友会時代の松田と原・西園寺公望は、イギリス風の政党政治を確立することを目指した。このため、彼らは、党の幹部が主導権を握り、衆議院議員を中核とした中央集権的で、政策の一体性のある近代的な政党を作ろうとしたことを、松田を中心に明らかにした。

本論文は中央政治のみならず、松田の出身地九州の実情を示すことで、1890年代初頭までの政党が各地域のゆるやかな結合によって形成されたもので、地域性が強く、政策の一体性の弱いものであったことを示した。この中で自由党が九州の地域性を克服して、九州にも地盤を形成し、衆議院の第一党になるにあたり、松田の存在が大きかったこと等を論証した。

なお、選挙区のある佐賀県で、松田は実業家層ら名望家層に基盤を拡大し、地方利益誘導に走らなかった。さらに、佐賀の乱が起こり、対外硬に傾き易い地域の対外硬論を抑制するため、松田は江藤新平復権運動などにも加担しなかった等の指摘も、興味深い。

本論文は松田正久研究にとって画期的であるのみならず、日本政党政治史研究の水準も高めた。

よって、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものであり、かつ、学界の発展に資するところが大きく、特に優れた研究であると認められる。

また、平成28年2月3日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。